

わたしのチカラの源は

”わ・た・し・！”

保村 美佐江 (グループ ほちほち)

いじめを苦にしたと考へられる子どもたちの悲しいニュースが後を絶たない。どうしていじめが起きるのだろうか？ どうしてなくならないのだろうか？ いじめとどう向き合ったらいいのだろうか？ 「いじめは無いもの」と考へてきたこの社会ではなかなか聞かえてこない問いかけた。この2月、イギリスから日本を訪れた「10代の子どもたちの参画プロジェクト」の取り組みから模索してみたい。

子どもたちが主体

いじめが深刻なのは日本ばかりではない。イギリスも然り。いじめをなくすさまざまな取り組みがNPO/NGO発で進められている。そのひとつに03年から始まった「IPOWER I (アイ・パワー・アイ)」がある。10代の子どもたちが主体

的にかかわるいじめ撲滅のキャンペーンだ。ダンスや歌などのパフォーマンス、子どもたち自身が考へた子どもたちのためのワークショップ(参加型学習、以下ワーク)を開催している。この2月、イギリスから演劇の手法による「アクションワーク」と呼ばれるワークを創ったチームがやってきた。日本の中学生と一緒にワークを共有し、いじめや暴力について学びあい、意見交換するためだ。

イギリスの子どもたちは14歳から17歳の4人(男女2人ずつ)、アラブ系・中国系・白人と多様な文化的背景を持つメンバ

ーだ。1週間の滞在中にリハーサル・公開ワークショップを含め、計6回のワークを実施した。期間中、筆者は2回のワークに参加したが、子どもたちのワークへの姿勢は自然体で、チームメンバー間においても、ワーク参加者に対して、対等な人権感覚に溢れるアプローチであった。2回目に参加した方が、子どもたちのファシリテーターとしての力量がアップし、また、参加者への対応も柔軟になり、その場に合った展開を進めると感じた。自分の意見を語り、いじめの現状を伝えたイギリスの子どもたち、ワークを通して参加した日本の子どもたちと共に彼らもまたさらにエンパワー(本来の自身の力を発揮すること)を体験していたようだ。

アクションワークの実際と可能性

ワークの一場面(フォーラムシアター)を紹介しよう。

：休み時間、廊下で気軽に言葉を交わしている様子。その後授業が始まると、ある子に向かって、消しゴムのかすを投げたり、背中をついたり、椅子を蹴ったりするいじめが始まる…このようにいじめの寸劇を見て「この劇の中にいじめはあるだろうか?」「あるとしたら誰におきているだろうか?」「どのタイミングで?」…そんな問いかけがジョーカー(進行役)から投げかけられる。観客は

